

## 自分を愛する心

第 11 期 土屋 晴香

小野ゼミに入って、一番変わったことは、自分のことが大嫌いになったことだ。情けないが、今思えば、入会以前から自分はひどかった。受験番号 1 番で臨んだ入ゼミ試験での先生面接の際、期限ギリギリ（というより期限の時間ぴったり）に提出した私の（クオリティの低い）ES を見た小野先生に、「君、のんびりしているみたいだけど、これから大丈夫？」と心配のお言葉をかけていただいたことを思い出す。

残念ながら、今になっても、成長していないようなことばかりしていて、大変情けない。卒論も、このエッセイも、もう締め切りを過ぎている。こんな私を入会させてくれた小野先生や先輩方に対して、これほど失礼なことはないので、成長した点もあると訴えたい。

小野ゼミでの活動は、失敗の連続であった。後悔や挫折はここには書ききれない。その度に自分の至らない点に気づき落ち込んだ。自分の欠点に気づき、克服しようともがく。小野ゼミに入会せず、ゆるゆると三田生活を送っていたら、この経験をするとはなかっただろう。小野ゼミに入会することがなければ、自分はいったいどんな人間になっていたのだろうか、想像するとぞっとしてしまう。

こんな小野ゼミでの貴重な経験ができたのは、間違いなく、小野ゼミに入って出会うことができたすべての人のおかげだ。小野先生は、ご心配をおかけしてばかりの私を見放さず、常に温かくご指導してくださいました。先生のお姿から、社会人、大人としてのあるべき姿、目指すべき姿を多く学ばせていただいた。大学院生・先輩方は、いつも優しく、楽しく、ときに厳しく接してくださいました。大好きで、尊敬してやまない存在だ。同期のみんなも、私の尊敬の対象だ。しっかりしたみんなの（クズだ、クズどもだ、というお叱りの）おかげで、多くのことに気づかされ、励まされ、ここまでやってくることができた。後輩のみんなからも得るものばかりだった。心から、みなさんに感謝したい。

正直に言って、自分は小野ゼミに向いていないと思うことが多い。しかし、私は、こんな経験や出会いを提供してくれた小野ゼミのことが好きである。入会することができてよかったと自信を持って言える。少しでも貢献したいと思う。この気持ちがあれば、小野ゼミにいることは間違いではないと、自分では思っている。

そして、冒頭で述べた、自分を大嫌いになったこと、その点が、小野ゼミに入って自分が一番成長した点だと考えている。というよりは、そんな自分を好きになれるよう、努力しなければならなかったことかもしれない。自分を好きになれるよう行動すること、つまり自分を愛する心を育むことが、私にとって最も難しい課題である。残りの小野ゼミでの時間も、大学を卒業した後の時間も、一生をかけ、小野ゼミに恩返しをし、自分を好きになれるよう励みたいと思う。

ところで、この「自分を愛する心」をいうフレーズは、先日ある授業で紹介された、吉野弘という人の「奈々子へ」という詩の中のものだ。卒業エッセイを書くタイミングでこの詩を読み、とても感銘を受けた。知らない人は調べていただけると幸いだ。